3

「南京を思い起こす 2009」の試み

笠井綾　MA、MFTI、表現アーツセラピスト
カリフォルニア統合学研究所東西心理学博士課程

1．アイデンティティを探る旅

じいちゃんとこたつでごろんとしながら聞いた事がある。「じいちゃん、戦争のとき人を殺した？」じいちゃんは答えた、「さあのう、昔のことじゃけん忘れてしもうたのう。」戦争はそんなふうに忘れてしまうほどの大昔にあったのか、と、小学生の私は思った。ばあちゃんなら覚えているかもしれないと思い聞いてみると、「さあねえ、聞いた事ないねえ。」と、本当に知らない様子。仕方なく父に聞いてみると、「戦争じゃったけんのう、そういう事もあったかもしれんのう。」と言った。誰に聞いたら本当の事を教えてくれるのか…私は不満だった。学校や、メディアや、書籍や、家族から、戦争に関するバラバラの噛み合ないメッセージが伝わって来る。どれを信じようとしてもしばらく考えているとつじつまの合わない壁にぶつかった。その壁の向こう側には、戦争を「遠い昔の事」とする日本の沈黙、祖父の沈黙があった。

2003 年、ドラマセラピスト、アルマンド•ボルカス氏が Healing the Wounds of History（「歴史の傷を癒す」以下 HWH と略す）の一環として催したプレイバックシアター“Speaking with the Enemy”（敵との対話）で、イスラエル、レバノン、韓国の若者達と並んで戦争体験継承のストーリーを提供した。祖母の被爆体験を語るのは慣れていたが、この時は「おばあさんの話を聞いて育ったあなたの体験を話してください。」と言われた。ストーリーを受け取ったアクター達は、祖母が私の手を引いて瓦礫となった広島を見せて歩くという、まさに私の心の体験を絵に描いたように演じた。そこで、今まで認識する事のなかった被爆三世としての悲しみに初めて触れることができ、涙が止まらなかった。会場が私の悲しみを受け入れて共感してくれていると感じると同時に、ある思いが口をついて出た。「広島は戦争によって大きな被害を受けたけれど、ア

ジアの国々で日本人が人々を苦しめました。日本人として申し訳ないと思います。ごめんなさい。」イベント終了後、帰ろうとしていると、10 人程のアジア人達に取り囲まれた。韓国人、中国人、フィリピン人、みんな目に涙を浮かべて、「ありがとう！ありがう！」と私を抱きしめた。一人の人間がたった一言ごめんなさいと心を込めて言う事が、このような癒しに繋がることを初めて知った。その癒しとは、政治、教科書、メディアに左右されない心の深い場所でお互いが繋がっていく感覚だった。そして大きく重い過去の歴史を前にしては小さな存在でしかない私にもできる事がある、という無力感からの脱出だった。

HWH のトレーニングやコミュニティワークの試みを通して被爆者三世としてのアイデンティティや自分が受け継ぐ痛みや悲しみに気付くと、小学校の時のあの疑問がよみがえった。祖父が戦争に参加していた国の若者達はどんな痛みや悲しみを受け継いでいるのだろうか。日本国外での暮らしの中で、アジアの友人や学生との交流の中で、その傷は時折垣間見えた。日本とアジアの戦争の傷を癒す事は可能だろうか。自分の目で見に行くしかなかった。

2007 年、南京師範大学で行なわれた、過去を直視し未来を共に生きるための国際会議「南京を思い起こす」に参加した。幸存者の証言を自分の耳で聞き、日中の歴史学者達が史実を検証しあう学会に参加し自分で考え、殺戮のあった現場に自分の足で立ち空気を感じた。そこで、教科書やメディアからではなく、私自身が見て感じた真実を手にすることができ、深い悲しみの中にも静かな安堵を覚えた。中国の人達はとても温かかった。彼らの見守る中、記念碑で祈りを捧げ心からの謝罪の気持ちを表現した。

会期中、私は戦時中に撮影された祖父の写真を持ち歩いていた。一緒に歴史学会に歩いて行く途中、中国の学生達にその写真を見せた。学生達は憲兵服に身を包んだ祖父の顔と私の顔を交互に見比べてしばらく複雑な表情をしていた。彼らも日本軍の漠然としたイメージを持っているに違いなく、そのイメージと目の前にいる私が結びつかなくて困惑しているように見えた。そのうちの一人が言った。「僕は承徳出身です。」承徳での日本軍の活動について何か見聞した事があるか尋ねると、彼はしばらく考えて、言いにくそうに話してくれた。「当時の日本兵はお金に困っていて、僕の農村に麻薬を売りに来ていたそうです。」この写真を見せる事で私と彼らの距離がぐっと縮まり、色んなことを話した。

この彼からは後日メールがあった。「いつか承徳に来てください。私が案内しましょう。お父さんが生まれた所に一緒に行きましょう。」そして最後に「あなた方と出会えたことを神に感謝します。」と添えられていて、また涙があふれた。彼はあの時敢えて私に言わなかった事もあっただろう。

ディスカッションの時間に、歴史を専攻する中国側の学生が言ってくれた事に目の覚める思いがした。「僕は日本が中国を侵略した事を怒っているのではありません。時代の流れの中で、色々な国が中国を狙っていた。戦争になったのは仕方がなかったのかもしれないとさえ思う。私が出会ってきた日本人はみんなやさしい人達です。その日本人がなぜ戦争の時に、一般市民や何でも言う事を聞くと言っている捕虜達を殺す事ができたのか、とても残酷なやり方で女性達を強姦殺害し子供達までをも殺すことができたか。僕は人間としてただそれを解明したい。なぜならその事を理解できなければ、人間は同じ過ちを永遠に繰り返すからです。」私達を責めるのでなく、人間として一緒に考えようとしてくれているその人の真摯な姿勢に胸を打たれた。やさしかった祖父と殺人のイメージがどうしても結びつかない私の知りたいと思っていることとその学生の知りたいと思っている事は本質的に同じだった。責められると思って南京を訪れることを恐れていた自分が恥ずかしくなると同時に、お互いの顔を見ながら対話することの大切さを思い知らされた。最後の日、劇団 IMAGINE21 による「地獄の December」を鑑賞し、中国参加者と共に涙を流した。ここでプログラム終了となり、やっと率直な気持ちを語り合いはじめることができたのに別れてしまうのが惜しく、一緒に時を過ごしてくれた中国人の仲間達がとても愛おしかった。ぜひまた来て対話を続けたいと思った。

2．Healing the Wounds of History の目的

HWH は、ドラマセラピスト、アルマンド•ボルカス氏が、ホロコースト生還者の両親を持つ自らの経験と、ユダヤ人虐殺のトラウマが二世、三世にまで精神的影響を及ぼしていること、第三帝国の子孫も加害者の子孫としての悲しみや罪悪感を抱えながら生きていることから、双方の民族がわだかまりを乗り越えて、自分らしく生きるための和解と平和教育のメソッドとして発展させてきた。ボルカス氏は「歴史で起こったことへの怒りや悲しみがコミュニティの中

で充分に表現されなければ、それらの感情は亡霊のように私達の生き方や、民族間の関係、コミュニティのありように影響を与える。」と述べている（2002、2003）。

このメソッドでは、まず25名程度の少人数で表現アートセラピーやドラマセラピーなどの技法を用いた対話を行い、その後、映像、パフォーマンス、アート、儀式などを媒体とした規模の大きなパブリックイベントを行なう。これは少人数での深く親密な体験を、より多くの人と分かち合い、こうした癒しの形が可能だという事を人々に示す目的がある。プレイバックシアターや、ドキュメンタリーの制作などは、有効な手法の一つである。

筆者はボルカス氏の通訳また時にはコ・ファシリテータとしてカリフォルニア、京都、広島などで2005年、2007年、2008年とHWHの試みに携わってきた。その中で浮き彫りになったのは、日本人の心の中にはまだ感じきれていない、表現しきれていない過去の戦争の痛みや苦しみがあるということだった。そしてそれを全身全霊で感じ、意識し、誰かに受け止めて共感してもらわなければ、他者の痛みに本当の意味で共感をすることができるようにはならないかもしれないのではないかと思った。人間は他者との関わりの中でしか共感や思いやりを学んでいくことはできない。筆者の場合も原爆の歴史に対するアメリカの対応に傷付きも救われもしてきたが、広島の被害者としての意識のほうが強かった。にもかかわらず、2003年のプレイバックシアターで、原爆の被害の話をしながら同時に加害者の立場からアジアの人々の傷を考えられたのは、私にとっての加害者である、そこにいたアメリカ人達が私の悲しみと怒りをしっかりと受けとめ共感してくれたからだった。感情を他者に受容される事で自分でも受容できるようになり、変容して新しい気持ちが生まれるのは多くの心理療法の原理であり、セラピストとクライアントの関係やグループセラピーのプロセスなどと重なる。この共感の力は私達人間が持つ自己治癒力であり、このコミュニティの共感の力を引き出す場をつくること、ひいては共感の文化を創る事がHWHの最大の目的と言える。

3.「南京を思い起こす2009」の試み、プログラムの流れと考察

2009年10月7日から10月10日にかけて、南京師範大学にてHWHの手法

を使って「南京を思い起こす 2009 〜戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み」を開催した。HWH は特定の技法が定められている訳ではなく、歴史の傷を癒すための 6 つのステップ（1.タブーを破る、2.お互いの人間性の確認、3.人間の内なる残虐性を見る、4.悲哀の共有、5.共同の儀式や創作、6.変容・創造・奉仕）を促すために、ファシリテータがその場その場に合った方法を提供していく。今回の試みでも、あらかじめ大まかな予定が決まっていたものの、どのようなエクササイズを使うかは企画者らが臨機応変に相談しながら決めていった。プログラムの流れを含めてここに記録しながら、この時点で集まっている参加者の感想などを踏まえ、主に日本人参加者として、またコ・ファシリテータの視点から考察していきたいと思う。

10 月 7 日　プログラム 1 日目

午前：シンポジウム

張連紅、村本邦子、楊夏鳴、アルマンド•ボルカスによる講演と 2007 年度参加者（陳新兴、董天艺、渡邉佳代、笠井綾）による報告。あらかじめネームタグをつけてもらい、通訳含む参加者 26 名がそれぞれ自己紹介をした。

予め、参加者全員一人 1 ページの自己紹介（参加動機、第二次世界大戦との関わり、メッセージを含む）を冊子にして読んでもらっており、すでに一人一人の個性とストーリーが見え始めていた。この時間を持つ事で冊子の自己紹介と顔が結びつき、グループとしての安全な場がつくられるよう試みた。また、この場を設けたその他の目的として、2007 年の成果報告、今回のプログラムへの結びつけ、これまでの経緯や 2007 年度参加者の個人的体験の報告を行うことで参加者のプロセスを促す、などがあげられる。日本人のほとんどが心理や対人援助分野からの参加であったのに対して、中国側は心理、歴史、語学などの多分野からの参加で、ドラマセラピー、表現アーツセラピー、HWH をはじめて体験する参加者がほとんどだった。したがって、このシンポジウムには、言葉による説明と、今回の試みが戦争の世代間トラウマに対する心理的なアプローチである事を再度理解してもらうという目的もあった。自己紹介から、参加者が歴史と心理の関連に興味を持ち、新しいことを学びたいという真摯な姿勢で参加している事が見て取れた。また 2007 年の中国人参加者は日本人参加者

の言動を詳細に覚えており、その時の心の動きを報告の中で分かち合ってくれた事に数名の日本人参加者が感銘を受けたようだった。

午後：記念館見学、アートでのプロセスとシェアリング

１日目の午後にこの時間を設けたのは、記念館が提供する史実を学び、日中参加者の知識の溝に気付く事、また見学中の自分の変化を感じ、気付いてもらう事で、二日目からのワークショップの中で共有できるテーマを作るというねらいからだ。午前の部が予定より大幅に延長し、当初に予定していた記念館見学の時間が短縮されたため、１時間半での急ぎ足の見学となった。多くの日本人参加者から「折角来たのにもったいない。もっとゆっくり時間をかけて見たり感じたりしたかった。」との感想が寄せられた。

また午前の部の名札をそのままつけて来た事に館内で気付き、複雑な心の揺れを感じ、そのプロセスは、日本人としての罪悪感から名札を取らなかったけれど隠すような気持ちでまわった、大勢の中国人見学者に復讐される事を想像し恐怖を感じた、日本人として見学する事の意味を感じ、敢えて名札を取らない事を決意した、など様々だったようだ。また中国人、日本人参加者共に体の重さ、吐き気、頭痛などの身体的反応の気付きがあった。

見学後、館内の広場で中日混合の小グループになり、画用紙とクレヨンを使って今の気持ち、思い浮かぶイメージなどを表現し、それをシェアしてもらった。グループで描いていると、多くの一般見学者が足を止め、興味津々に覗き込んでいた。子供達も飛び入り参加し、にわかコミュニティワーク、公共アートパフォーマンスのようになった。屋外で太陽と風と水と緑の中で、子供達が参加してのアートワークに温かさや希望を感じたり、大人達からは見守られている、ここに来た事を見てくれていると感じる反面、参加者グループの安全性もまだ確立されていないこの初日の段階で、想定外の露出に対する不安や戸惑いも見られた。ファシリテータとしてもグループの安全性の確保を優先したいので、午前中に見学して午後から会場に戻ってワークするなど、今後の方法を考えたい。その上で、後半になんらかのコミュニティーアートプロジェクトをプログラムに組込む事も重要と思われる。

10月8日　プログラム2日目

午前：HWH ワークショップ

ウォームアップエクササイズ：

円になって、

名前と動き　名前と動きを使って今の状態を表現する。一人が表現すると全員でミラーリングすることによって共感を促す。

雷まわし　一人一人の表現した音と動きをウェーブのようにまわす。より自由で自発的な表現を促す。

想像のリレー　そのものがまるでそこにあるように、次の人にわたしていくことで知らず知らずのうちに演技する事に慣れていく。小鳥、てんとう虫、マッチ、金魚鉢から出した金魚、など。

音のボール　音の出るボールを一人が投げると、投げられた人はまずその音をリピートしながらボールを受け取る。受け取ったら新しい音にして他の人に投げる。ボールは2個、3個と増えていく。声を出すことや積極的なコミュニケーション促す。

列になって、

ここからあそこへ　演技や動きを使ってそれぞれ好きな方法で一人ずつ部屋の角から角を歩ききる。より長い時間自発的で自由な表現をしながら、それを他者に見られる事に慣れることを促す。

ここからあそこへ（ペア）　ペアで、相談する事なく突然即興で演技に入りながら部屋の隅から隅まで歩ききる。上記に加えて、他者と共に想像をすることでペアでの即興性を促す。

2重の円になって：

30秒シアター　ペアになって与えられた役を30秒間演じる。警官と交通違反のドライバー、校長先生と怒られる小学生、公園で出会ったシャイな5歳児、白紙のコンピューター画面と閉めきりに迫られているのに書けない学生、釣り人と魚、ダイエット中の人とケーキ、騎士とドラゴンなどを演じることで、「加害者、被害者」「敵」「力関係」「葛藤」「ぎこちなさ」など、対話と和解の試みのプロセスの中で浮かび上がって来るテーマを、想像力とユーモアを持って演

じることを促す。また、全員が一斉に演技をするため、恥ずかしさが薄れ、大胆さ、即興性、遊び心が引出される。また、物も動物も言葉を発する事ができるおとぎばなしや空想の世界に入っていく。

ラインレペティション（台詞の練習）

決められた台詞を、言い方を変えて繰り返す。

ほしいよ vs だめです

ごめんなさい vs ひどいよ

ここまでの時間、参加者ははじめての事ばかりで驚いたことだろう。日本と中国、東洋と西洋の表現の違い、体の使い方の違いも浮かび上がって来た。しかし最初は固かった身体表現も、だんだんユーモアのあふれたものになってゆき､子供に帰ったように遊びに身を委ねる姿も見られた。ペアワークの中には、私達の中にはお互いと遊びたがっていて、相手に興味津々の子供の心があることを感じ、言葉が違っても、表情や動きでコミュニケーションができること、体を使って遊びの中で格闘や口論ができることを実感してもらうという目的もあった。最後の台詞を使ったワークでは、「ひどい、ごめんをくりかえすことが辛く感じられた」「許してもらえないが、謝る事ですっきりしていく」など、参加者はテーマによりいっそう近づいた感情が沸き上がることに気付いたようだ。

ソシオサークル（社会の輪）

輪になって、テーマに即し自分にも当てはまる事実を一人が開示すると、自分もそうだと感じた人は一歩前に出て輪を創る。お互いの目を見て承認し、共通の点を持っている事を確認する。

両親が直接戦争にかかわった人

祖父が兵士だった人

祖父母から戦争の話を聞いたことのある人

戦争被害者から直接話を聞いたことのある人

自分も戦争の影響を受けていると感じる事のある人

南京の悲劇に怒りを感じる人

被害と加害の両方のアイデンティティを持っていると感じる人

私の名前は～です。私は～人です。（アイデンティティのワーク）

日中の参加者の前で自分の名前と国籍を名乗る。グループを前にして、「私の名前は～です。私は～です。」と声に出して言い、沸き上がって来る気持ちや感覚に気付くワーク。ファシリテータが公開インタビューのように進める。何度か言ってみて、いくつかの違う気持ちに気付いたり、別の言語で言う事で違う気持ちが出てきたりする。今回は、日本人一名、日本に在住経験のある中国人二名が、両国の参加者を前にして感じる複雑な気持ちや、南京の地ではじめて感じるアイデンティティをシェアしてくれた。一人で前に出て自己開示する事は慣れていても勇気のいることで、初めての人は特に挙手しにくかったに違いない。何人かがこのワークを行なうのを見ると、それぞれ頭の中で自分だったらなんと言うかシュミレーションしているものだ。それでも、小グループに分かれて、全員がグループの中で体験できるような時間があればよかった。

メッセージの地図　（アイデンティティの解体と構築）

私達のアイデンティティやお互いの日中に関するイメージは、家族、学校、友人、地域コミュニティ、メディア、インターネット、政府、書籍などから常に様々なメッセージを受け取って形成されている。どこからどんなメッセージを採り入れてきたのか、それらにどんな影響を受けてきたのか、実際に地図を描くことによって解き明かす。また、一人の地図をみんなで再現し、その人の地図の中に参加する事で共感的理解をうながす。両国参加者がお互いの地図に入り込む事で、お互いのうちなる葛藤を身をもって感じる事ができる。今回は、日本人ひとりの地図を例として再現した。そうすることによって、その人がおかれている状況や取り巻く情報環境が明らかになり、共感が可能となった。この参加者は、メッセージの地図のエクササイズによって、他の参加者との距離が飛躍的に縮まったと述べている。誰だかわからない漠然とした「日本人の一人」から、個性的なストーリーを持つ「M さん」へと、グループの認識が変化したからだろう。

午後：HWH ワークショップ

アイデンティティーワークの続き

お昼の間にメッセージの地図をそれぞれ書き込んでもらっており、ぜひ中国人のアイデンティティも見たかったが、より深い個人のストーリーに近づくため、関連する別のエクササイズを行なう事にした。

まず小グループに別れて、戦争のテーマに関して初めて意識するきっかけになったエピソードや、自分の日本人、中国人のアイデンティティを意識したエピソードなどをシェアしてもらった。普通に話をする時間もこれまで限られていたため、与えられたテーマだけでなく色々な話題について活発な会話が行なわれており、時間を延長した。いくつかのグループでは、ひとりひとりのメッセージの地図のシェアリングもされていた。これにより参加者同士の距離が縮まったとの感想が多かった。

この後、午前は日本人だったので、午後はぜひ中国人のアイデンティティを見ようということになり、小グループで話した中から二人のストーリーをグループサイコドラマで再現した。一人目のＲさんは地方に言い伝えられている日本軍の話を子供の頃に聞いて、日本人を怖いと思ったことを話してくれた。怖い日本軍人に、空想の中で子供のＲさんが話しかける事ができたとしたらなんと言うだろうか？参加者三名が子供のＲさんになって共感し、村の人を傷つけた日本人に気持ちをぶつけた。

二人目フアさん（仮名）のお話は、日本軍に強姦された村のおばあさんとフアさんの間にある見えない壁のお話で、参加者三人が見えない壁として、一人がおばあさんとしてドラマの中に入った。近づきたくても近づけない悲しみ、暴力に対する怒り、強姦体験、戦争体験がタブーとされることへの怒り、おばあさんの無言の中に世代を超えて子供達に伝わっていく苦しみや悲しみを感じ、フアさんに共感して涙していた参加者は少なくない。このドラマの中でフアさんは、壁を超えておばあさんと抱き合うことができた。現実では叶わなかったことが、ドラマの中では叶えられる。

この二つのドラマは、記念館などで見聞したものと違い、目の前にいる同世代の若者が実際に受け継いでいる戦争トラウマのお話で、日本人参加者の心に強く響いた。どちらも幼い頃の話で、いかに戦争のトラウマが子供達に伝わり、安全を脅かしていくかということ、また自分の中にもこのように幼い頃受け継いだ戦争のトラウマやそれによって形成された他国へのイメージがあるのだということに気付いた、などの感想があった。日中、中英、日英の六方向通訳を介しながらのサイコドラマのファシリテートは困難な場面があり、スムーズにコミュニケーションを行なうための今後の工夫が必要とされる。この日はこのサイコドラマのシェアリングを時間の許す限り行なって終了した。加害者に対する怒りや、加害者としての罪悪感、または加害者へのアイデンティフィケーションをとても強く感じて辛くなった日本人参加者もいた。これはもっともな反応だ。ただ日本人だけで歴史を学ぶ時や、メディアや書籍から一方的に情報が入って来るときと違い、沸き上がってきた気持ちの先にはストーリーをシェアしてくれた相手国の仲間達がいる。この日も、日本人参加者がシェアリングの時間や、ワークショップの後に、沸き上がって来た素直な気持ちを中国側に伝え、心で対話することで温かさが生まれる場面があったことが、参加者のジャーナルを通して見えてくる。時間が足りず、この大切なプロセスをワークショップの時間の中でもっと促せなかったことが悔やまれる。

10月9日：プログラム3日目

午前：幸存者証言

体を使ってドラマのエクササイズでウォームアップをした後、幸存者の常志強さんをお招きし、証言をしていただいた。まず誰に向かって話しているのかわかっていただけるよう参加者全員が出身、専門、名前の自己紹介をし、円になって座った。通訳を介しながら、常志強氏は9歳の当時に戻り、涙を流しながら二時間以上もかけて想像を絶する残虐な体験を話してくださった。参加者が感じた事を少しでもお伝えしたく、常志強氏も強く若者達との交流を願っておられたので、無理をお願いして昼食・休憩を挟んで一時間ほど一緒に過ごしていただいた。一人一人が一分ずつ感じた事をお伝えした。常志強氏は、みんなの気持ちを受け取ってくださり、参加者全員と握手をして、ご高齢のお体を

みんなが心配する中、タクシーでの送迎を断ってまた一人バスで遠くの家まで帰って行かれた。

午後：人体彫刻

参加者から「体が重い」など、身体症状を訴える声が多く聞かれたので、午後の残り時間を使って体を動かすワークをすることになった。ボルカス氏の指示、「幸存者のお話を聞いて共感した私達は今、彼と共に戦争のトラウマを受けた 9 歳の子供になっています。たくさんのイメージが皆さんの中に焼き付いているでしょう。でも二次受傷をするためにお話を聞いたのではありません。彼が私達にくれたストーリー、これを消化・統合するために表現していきましょう。」日中混合の 4 〜 5 名の小グループに別れ、一人一人が彫刻家となり、心の中にある気持ち、イメージ、心に残った場面を残りのグループメンバーの体にポーズや台詞を付けて表現していった。全員が彫刻を表現し、タイトルもつける。それをよく覚えておいて、後で発表する際に彫刻がスライドショーのように次々とステージで再現されるようにリハーサルも行った。そして最後に、二十数名の参加者一人一人の創った人体彫刻が、グループごとに、ひとつずつ儀式のように、みんなの前で再現された。あたかも私達の中から出て来たもので創られた壮大な戦争絵本を見ているようだった。そこには言葉を介さずとも、証言を聞いて感じ得るすべての気持ちが表現されていたように思う。

戦争体験を話すと言うことは大変な作業であるにもかかわらず、癒しに繋がらない事が多い。よくある戦争体験の証言は、生存者が顔の見えない大勢の前で、長い人生のうちの戦争体験の部分だけ話し、それが終わったら去って行くというものだ。広島の被爆者のある語り部の方は、「修学旅行生に話をするときは、睡眠薬を飲んでから話します。」と話されていた。最近の脳とトラウマの研究では、恐怖に直面したとき、私たちの脳は個人的な体験を言語へと変換する作業を担う機能が停止し、その他の感覚が研ぎすまされた状態で情報を記憶するため、トラウマの記憶は言語としてではなく身体的な感覚やイメージとして蘇るということが示されている。また、一度思い出すとその時のすさまじい感覚が次々と蘇ってしまうという（ヴァン・デア・コルク、2001）。それほどに大

変な語りの作業は、受け取り方を工夫して、少しでも語る事が癒しに繋がる努力がなされねばならない。話を聞く側の体験はどうだろうか？平和教育の一環として、「語り聞かせ」は大切にされてきた。しかし、戦争体験のない若い世代に何かを得てもらうためには、ただ受け身に聞いてもらうだけでは不十分だろう。戦争体験はあまりにも重く、その重さに押しつぶされてしまうか、もしくは「自分とは関係のない昔の話」と距離をおいてしまうことが多いのではないだろうか。想像を絶する凄まじい戦争体験に共感し、自分の中で意味あるものとして受け取るためには、何歳の人間にも消化・統合のプロセスが必要だ。聞き手の「怖い」、「悲しい」、といったリアクションも「共感する力」として受け止められなければならない。そして、心と体を通してストーリーを感じ、沸き上がる様々な感覚や感情に気付くことで、「私には関係のない昔の話」は、「意味のある大切な話」に変わる。3日目となるこの一日を通してこれが体験されるよう努めたつもりである。参加者からは、幸存者と握手をしたこと、思いを伝えられたことに対するポジティブな感想が寄せられている。また、後の体を動かす事への快感、開放感、表現の自由さを感じた、メンバーの感情も心と体で体験できたというレポートがあった。幸存者の常志強氏には、「みなさんと交流できたことは、この上ない喜びです。」と言っていただいたが、私達に話す事によってその苦しみから一時でも安らいでいただけた事を祈るばかりである。

10月10日：プログラム4日目

午前：追悼式

揚子江河岸にある記念碑の燕子廟にて、追悼式を行なう。本来ならば、追悼式も参加者が話し合って方法を決めるべきだが、時間が限られていたので企画者三名が話し合って決めたことを提案した。まず、記念碑までの階段を日本人と中国人のペアで上り献花、追悼の祈りを捧げ、お互いが証人となる。その後、中国グループで、そして日本グループでそれぞれ献花、追悼を行なった。この一連の儀式は一般市民にも公開され、参加者の追悼の姿を見せることがコミュニティへの働きかけになることを願った。その後思い思いに公園内を散策し、記念写真の撮影や一般市民との会話もおこなわれていたようである。

参加者は全員が真摯に、そして厳粛にこの儀式に取り組み、思い思いに自分

のやり方で悲しみ、追悼、謝罪の気持ちなどを表現し、犠牲者の冥福を祈った。殺戮の行なわれた地に立ち儀式を行うことで、個人でもグループでも改めて色々なことを感じていたようである。中国参加者からは、日本人グループが涙を流し、哀悼、謝罪を表現していることに心を動かされた、一緒に泣いた、との感想が寄せられている。通りすがりに、また遠巻きに見ていた一般市民の感動も中国参加者のふりかえりを通して報告されている。階段を上る過程が中国と日本の結婚式のように感じられた、と感想を残してくれた日本人参加者もいる。日本人参加者数名が、散策の時間に、実際に歴史の現場に立ってみることの意味、南京に来てワークを行なう意味がここでよくわかったことを伝えてくれた。この場でしか感じられないことがあり、場がプロセスを引き起こし、後押ししてくれるのである。さらに印象的だったのは、儀式の直後の散策の時間に、参加者の表情がとても明るく、穏やかになっていたことだ。この日だけ同行し、一緒にバスに乗っている時は神妙な面持ちだった中国人カメラマンの方までも、穏やかに微笑んで、この場に立合えた事の感動を言葉で伝えてくれた。

午後：統合と振り返り、プログラム評価

粘土の彫刻美術館

南京師範大学の会場に戻って、粘土のワークをおこなう。土の粘土を捏ねたり、なでたりしながら、この 4 日間の体験を振り返り、沸き上がってきたイメージや、持って帰りたいイメージをそれぞれ制作した。それを画用紙の上に置き、タイトルをつけて、会場が彫刻美術館になったように展示した。通訳を介しながら、ひとりひとりの作品をみんなで見てまわった。

プログラム評価

円になって座り、ひとり一分ずつ、プログラム前後を比較して気付いた自分の変化をシェアしてもらう。

最後のドラマワーク

30 秒シアター（ペアワーク）

水槽の中でテリトリー争いをする二匹の熱帯魚

飛行機が墜落しジャングルでサバイバルしているがお互いに嫌気がさしている生き残りの二人

昔話シアター

ペアで、最初の一人が「むかしむかしあるところに…」と話し始める。ファシリテータの合図で話し手が入れ替わることを繰り返しながら架空の昔話をつくっていく。徐々に体も動かしながら演じる。

アレゴリー

「昔々あるところに、一人の中国人と、一人の日本人がいて、二人で歴史の傷を癒すための旅をはじめました。」の続きを昔話シアターの要領でつくっていく。その旅路で3つの物（橋、竜、丘の上に住んでいる老夫婦）に遭遇する。

今回、記念館にて、そして記念碑の麓で、想定外に現地の子供達とふれあう機会を持った。参加者達が、みな求めるように、吸い寄せられるように子供達の方に向かって行っていたのが印象的だった。私達は、希望を、未来を欲してやまないのだ。そしてなんとしても新しい命を守ってゆきたい。最後の粘土のワークの多くにはそんな夢や祈りが、夢以上の決意や確信となって表されていた。またここまでのプロセスによってどんな気持ちも表現してよいという安全性が確保されたのか、表現はとても豊かで、創造的で、バラエティに富んでいた。怒り、アンビバレンス、戦争の普遍性、やさしさ、忘れない決意、などが表現されていたテーマの一部である。粘土をこねて形にすることで、これらの気持ちが個人の中で、またグループの中で再統合されるよう願ってこのエクササイズを選んだ。誰もがこの作業を心地よいと感じ、楽しんでくれたようだ。粘土は実際に焼いて陶にすることも、水に付けて粘土に戻すことも、土に帰すこともできる。

プログラム評価では、両国の参加者が、プログラム以前の不安や懐疑的な気持ちがどう変化していったか、率直な言葉で述べてくれた。直接対話の意義、自分の受け継ぐ歴史トラウマの気付き、心理的側面からの歴史問題への可能性、癒しの可能性、ドラマやアートを使うことの意味などがテーマに上った。またお互いの民族に対する印象、歴史に対する認識が変化したことを示唆するコメントも多く見られた。詳しくは、この冊子に含まれている参加者の感想を例と

してみていただきたい。

4．これからの課題

コ•ファシリテータとしての体験を振り返ってみると、西洋で発展して来たドラマセラピーや表現アーツセラピーの手法を、欧米人と日本人のファシリテータが持ち込み、中国人参加者に少なからずショックを与えたり、通訳を通しながら日本語や英語で指示をだしてグループを動かすこと自体が、筆者に西洋の宣教をベースとしたコロニアリズムや、日本による侵略や日本語の強制学習の歴史を思い起こさせ、度々心苦しくなった。そもそも加害側に属する者が和解グループのファシリテートをするのは間違っているとも言える。それは例えば、DV の加害者が、被害者との和解をファシリテートするのがおかしいように。しかし、ユダヤ人のボルカス氏によると、「ドイツ人とユダヤ人のこのような和解ワークを持ちかけるのはいつもユダヤ人であるこの私で、ドイツ人のナチスの子孫の方から私に和解ワークの話を持ってくることはない。日本人であるあなた達が和解ワークをしようと中国側に持ちかける事自体がとても大きな意味を持っている。もしドイツ人がこのようなワークを率先してファシリテートしてくれたら、私だったら嬉しく思う。」と言う。そして、芸術表現は国境、文化、言葉の壁を超えることができ、今回の試みでも多くの場面でその普遍性を感じた。相反するがどれも真実であり、コ・ファシリテータである私個人の乗り越えられていない心の問題でもある。これらをすべて考慮しながら、上下関係の重んじられる文化の中で参加者からのフィードバックがもっと自由に行なわれる安全性を確保すること、将来の試みには中国側にもファシリテートに加わってもらうことなどを考えていきたい。加えて日本人ファシリテータが中国語を学ぶ事、西洋ファシリテータが非西洋的コミュニケーションや表現の仕方を理解する事に努める、なども課題としてあげられよう。ドラマエクササイズやアートワークの数々にしても、欧米から派生したものをそのまま使うのではなく、それにヒントを得ながら、中国に昔からある表現芸術、また中国と日本が共通して持っている表現方法を応用して使うことができれば、参加者はもっと自然体でワークに参加し、自由に表現することができるのではないだろうか。これからぜひ模索していきたいファシリテータとしての課題である。また、集

められた録音、映像、ジャーナルなどのデータを使った研究や各分野での発表もはじまったばかりである。日米中共同での各分野からのプログラムの評価や分析を続けていかねばならない。

5．おわりに

起こったことすべてをここに書ききれず、中国参加者の感想に翻訳中のものがあるため本稿の中にすべてを反映させることはできないが、これをもって現時点での報告に代えたいと思う。最後に、日本に到着して、今回は 2007 年の時と比べて自分にどのような変化があるかフォーカスしてみた。と言うのも、2007 年の時は中国ではあまり出なかった身体症状が日本に着いたとたんに出てきて大変だったのだ。加害の歴史にはじめてきちんと向き合ったことで罪悪感と恥の気持ちが前面に出て来てしまい、帰りの列車の中でも、中国に戻りたい、自分など消えてしまえばいいとつじつまの合わぬことを思い続けた。結局それを救ってくれたのは一緒に過ごした中国の人達の温かさで、それを感じることで自虐的な感情から抜け出し、自分に対する揺るぎのないやさしさや哀れみの気持ちを再発見することができ、今では貴重と思える体験となった。今回は自分はどんな帰国の体験をするのだろうか。

それは神戸に向かうバスの中でとても穏やかにやってきた。日本人としての誇りのような気持ちだった。大きく重い歴史の海を前に、私は一粒の雫でしかないけれど、その雫には意味があるという確信と誇り。海の水のように感じた人間のつながり。私は紛れもなく日本人で、そのことが嬉しい。2007 年から、一歩前に進んだ、清々しく誇らしい気持ちで日本に帰ることができた。だけど、ここが終点ではない。心の旅は続く。次回の帰国はどんな体験になるだろう。

歴史、心理、芸術、平和教育、アクティビズムが一体となった HWH メソッドの説明をするのはとても難しい。もともと言葉で語り尽くせない「トラウマ」や「沈黙」や「タブー」をドラマやアートを使って心理的にプロセスしていくのだから、実際に参加してもらわなければわかってもらえないことが多い。にもかかわらず、打ち合わせで中国を訪問した際、南京師範大学の歴史学者である張連紅氏が簡単な説明と企画書から、私達の試みを深く理解してくださっていると感じた。それは、張氏はこれまで何百人もの生存者と調査などを通して

関わり、戦争が残した心の傷が今でも生きていること、生存者の苦しみが終わっていないことを身をもって知っておられるからだということが今回お話しさせていただいてよくわかった。南京航空航天大学の羅萃萃さんは四日間通訳をしながらワークショップにも参加し、プログラムを支えてくださった。お二人に心からお礼を申し上げます。コミュニケーションを支えてくださった、楊夏鳴氏、黄辛隠さん、キャシーさん、現地でのアレンジをしてくださった陶さん、そして、折角の連休を返上し、仕事や授業を休んで参加してくださった日中のみなさん、一人韓国人として参加し、証人の目で見守ってくれた金さん、カメラマンの土井さん、通訳翻訳に奔走してくれた戴さん、翁さん、現在も翻訳やテープ起こしをおこなってくれている皆さん、本当にありがとうございました。そして誰よりも情熱を持ってこの企画のために奔走し、先頭に立って再度私達を中国に導いてくださった立命館大学教授、村本邦子さん、経験の浅い私をいつも同僚として扱ってくださる懐の広い師、カリフォルニア統合学研究所のアルマンド・ボルカス氏、お二人に出会うことができたことを幸運に思います。これからもこの共同研究が続いていくこと、またこの研究が世界中で起こっている、そして忘れられていない紛争や対立の解決に少しでも貢献できることを願ってやみません。

参考文献

笠井綾（2007）「こころとからだで考える歴史：HIROSHIMA STORIES コミュニティワークの自己治癒力」『新しい芸術療法の流れ　クリエイティブアーツセラピー』関則雄編、フィルムアート社

ヴァン・デア・コルク、マクファーレン、ウェイゼス（2001）「トラマティック・ストレス−PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて」西澤哲監訳、誠心書房

Volkas, A., Keynote address, Dramascope, Vol.XXIII, Issue 1, 2002/2003, pp.6-9. 中野左知子訳

Volkas, A. (2009). Healing the wounds of history: Drama therapy in collective trauma and intercultural conflict resolution. In R. Emunah & D. R. Johnson (Eds.), *Current approaches in drama therapy.* Springfield, Illinois: Charles C. Thomas.